

福岡きぼう中学校と識字学級

2022（令和4）年、福岡市に、「福岡市立福岡きぼう中学校」が開校しました。九州初の公立夜間中学校です。この学校は、義務教育未修了の人、不登校や病気、家庭背景などにより、十分学校に通えず、学べなかった人、外国籍で就労している人など、年齢や国籍を超えた学び直しの場として設置されたものです。

学校教育を受け、文字を読み書きできることが当たり前のように感じ生活してきた私は、学びを保障されなかった人々の思いを現実として捉えきれませんでした。

そのような私の認識を変えたのが、教員になって出会った識字学級です。

私に関わる識字学級は、今から60年前、部落差別による貧困やいじめにより、学校に行きたくても行けなかった人々が文字の読み書きができるようになりたいとの切実な思いを集めて、自主的に立ち上げられました。

「こんばんは。識字です」の挨拶から始まる識字学級は、教育や啓発を担う教員や行政職員などが学級生の家庭を訪問し、文字の練習や資料をもとにして共に学習を行う

よしこさんは、うなずきながら話を聞いた後、真剣なまなざしで私をみつめながら、

「子どもたちに正しい知識や人を大切に思う思いやりが身につく教育をしっかりと願います。子どもたちが学んだことを大人に伝えることで、差別のないみんなが安心して暮らすことができる世の中になると思います」

と、凜とした声でおっしゃいました。

私は、この言葉を聞いた時、教育の大切さを再認識しました。そして子どもたちとしっかり向き合うために、私自身が人間としての生き方を問い直し、学び続けていくことが大事だということを変更して感じました。

識字の灯をともし続ける原動力

いつも和やかな様子のよしこさんですが、こつもおっしゃいます。

「識字学級に参加したはじめの頃は、先生（識字担当者）が訪問してこられた時に、どきどきして、すぐにはドアを開けられなかった」と。

忙しい一日を終え、疲れが溜まった後に始まる識字学級で、よく知らない相手を家に招き入れ文字を学び直すことには、きつさはもちろん、さまざまな葛藤があったことが

形で行われています。

学級生の思いにふれて

私が担当する学級生のよしこさん（仮名）は、子ども会への関わりを機に、部落差別をはじめとするあらゆる差別をなくす運動を40年以上進めてこられました。最初にお会いしたときから、穏やかな笑顔で私たち担当者をあたたかく迎えてくださいます。

ある日、小学校で学習した『一枚のはがき』という題材についてよしこさんに話をしました。よしこさんと同じように識字学級で文字の練習をし、ようやく一枚のはがきを書き終えたおばあちゃんの話を取り扱った学習内容です。その時、次のような授業後の子どもたちの感想も伝えました。

○何度も書いては消すことをくりかえしながら文字を練習するおばあさんの姿から、部落差別を乗り越え、文字を取り戻そうとする思いを強く感じました。  
○差別は、人生のとても大切なものを奪うことが分かりました。  
○みんなが、安心してくらせるよう、差別やいじめをなくしていきたいです。

想像できます。その葛藤を乗り越えることができたのは、ともに差別をなくす仲間として担当者を信じ、受け入れ続けたからだと思います。

先のきぼう中学校は「教育を受けられなかった方々の心の中にきぼうの明かりとなるように」との思いがこめられています。

識字もまた「きぼうの明かり」を求めて60年間ともされ続けているのです。

